

常光寺々報

2019/5

永代経法要

五月十二日(日) 朝十時半〜十二時

昼一時半〜四時

京都女子大学名誉教授

本願寺勸学寮頭

ご講師 徳永 道雄 先生

※お昼にはおいしいお齋ときがあります。

如来の作願をたづねれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

(親鸞聖人)

法座の案内

やすらぎ法座 五月二十三日(木)十時〜

光輪法座 六月三日(月)昼一時半〜

徳永先生には、本願寺の勸学寮頭

という大変な要職にありながら、いつも快くご出講をいただいております。毎年お出でいただいていると、甘えてあたりまえのようにも思ってしまうのですが、しかし、このご縁はめったにないご縁です。どうぞ、仏法のご縁を大切にされて、ご聴聞くださいますようご案内申し上げます。

追憶

僧侶になって初めて筆を持つようになりしました。また僧侶になって初めてお聖教(仏教書)を読むようにもなりました。読み書きソロバンと言いますが、初めはどちらもまったく歯が立たないものでした。だから、もし僧侶になつていなかったら、お聖教も筆も持つこともなかったでしょう。それに、かけがえのない先生方との出会いもきつとなかったはずです。そうすると、

私の人生はどうなっていたことでしょう。先生方との出遇いは、すべて徳永先生との出遇いによるものでした。つくづく不思議のご縁を感じます。

聞かせてもらえや

藤沢先生が入院中のあるご婦人を見舞いに行かれた時、そのご婦人がしみ語りてくださったことです。

——八十歳の母は、少々弱っていたのですが、私の身を案じて見舞いに来てくれました。私の顔を覗きこんでいた母が、やがて、「何も間に合わなかったのう。それで、今日はお念仏さまを持つてきたぞ……。つらかったら称えんでもええ、聞かせてもらえや、聞かせてもらえや……。」と言いながら、私の側で静かにお念仏を称えてくれました……。

私は母の称えるお念仏を聞きながら、

私を心配してくれる親心を痛いほど思い知らされました。そして母の称えるお念仏を通して、如来さまのお慈悲のありつたけを、私一人がいただいているということに気づかせていただいで、うれしくて、もったいなくて、思わずお念仏させていただきました……と。

このご婦人は先生が訪ねられてから一週間後に亡くなられたそうです。

ありがたいお母さんですね。おかげで、いい往生ができましたね！

メモントモリ

哲学者の田辺元博士には「メモントモリ」という短文のエッセイがあります。この「メモントモリ」という言葉は（死を忘れるな）という意味のラテン語らしいのですが、その中で博士は、

「毎日のラジオがたあいなない娯楽番組に爆笑を強い、芸術の名に値せざる

歌謡演劇に一時の慰楽を競うのは、ただ一刻でも死を忘れさせ生を楽しませようというためではないか。（死を忘れるな）の反対に（死を忘れよ）が現代人のモットーであると言わなければならぬ」と指摘されていますが、

まったく、この先、死を忘れた現代人はどこへ向かっていくのでしょうか。

仏教は（死を忘れるな）と教えます。

妻よ

ああもつたいなし もつたいなし

妻よ 貧乏なればこそ

こんなにいい月も見られる



病に臥し、貧しさの中で暮らしていた山村暮鳥が、こんな暖かい病床の詩をのこしています。健康で、平凡な生活を送っている者には「こんなにいい月」は目に入らないのでしょうか。愚

かな私などは、平成最後の満月までも見過ごしてしまいました。

人生の問い

何のために生まれてきたのか。

何のために生きているのか。

それが分らんままに死んでしまったのでは、せっかく人間に生まれてもその甲斐がなからう。

仏教は、「人身受け難し」と教える。

人間に生まれるのはめつたにないことだと。―私どもは、あらかじめ何も知らされないままこの世に生まれてきました。どこからやってきたのか、どこへゆくのか、何も知らないまま、呑気に今を生きている。こんな私は一体、何者なのか。人間というものを知りたい、私自身を知りたい。そんな人生の大きな疑問がなければ、仏法はなかなか簡単には聞けないのだろう。